

# 汲古一心

## 『碑・銘、その他』(二)

中村素堂

昭和十八年ごろか、隅田川畔に明治天皇聖跡記念碑が建てられる時、竹下勇大將が委員長で、今の東京芸大、そのころの美術学校の教授日名子実三先生が設計の天平風の屋根のついた珍しい碑で、題字は明治神宮の有馬良橋宮司の揮毫、本文が私。まことに肩の凝るものであったが、碑文でこのくらい配字に大事をとったものはない。しかしご大礼の賀表が先例にあつたため、思ったよりすらすらと運べた時は大変うれしかった。

大きな碑を七十いくつか書いたのに一々このようなことを書くのもうつとしいので、少し河岸をかえて、ごく小さい碑でひとつの新しい風格を打ち出した碑の思い出を書きましよう。

東海道線小田原駅の駅長室前に現存する同駅戦前の駅長松本氏殉職の碑は、高さ百七十センチくらいの自然石に刻したもので、撰文はそのころ文壇の巨擘であつた菊池寛氏のもので、「鉄道を利用して旅行をする人は一度ここに佇ちどまつて、この人のことを考えてみて下さい」といった口語体の平明なものであるが、ひとりの責任者が命にかけてその職場の安全を守つた壮烈な事実を十分に語つていた。

碑の表は、「昭和〇年〇月―菊池寛」とあるだけ、碑の背面に私が書したとしてあるだけの簡素なものだつた。除幕式は七月半ばの暑い日で、参列者は流汗淋漓だつた。式後、菊池寛先生と私は小田原城外の古い鰻屋に案内され、一浴休息するようにと請われたが、私が何度勧めても先生は風呂に入らない。あまり勧めたら機嫌が悪いみたいなので、私だけ一浴してきてみると先生は扇風機に吹かれて午睡されていた。吊してあるモーニングの肩のところ汗が乾いて塩を吹いている。そして先生は何となく酔っぱい匂いがする。並んでご馳走になつてもこの臭気が鼻について困つた。

戦後先生が長逝されて、文芸各誌に追憶談が載つたのを見ると、みんなこの風呂嫌いの臭気に困つたと書いていたので、やっと私も判つたような気がした。でないといふ私は文豪といふものは、みんなあつた風臭いものかと思うところだつた。

後年も後年、戦後の昭和三十年ころか、山下奉文元師の未亡人が当時その副官だつたといふ井関元中将と一緒宅へ見え、山下將軍の記念碑と墓表も書いてほしいといふお話で、長い碑稿を拜見した。

この時その井関元中将のお話で、碑というものは漢文かその直訳体、または擬古文風の国語文だつたのが、菊池寛先生が小田原駅長記念碑を書いたのが口語文碑の始まりで、あれから現代文のものが建てられるようになったのだそうですね、といわれ、この碑が日本碑文の歴史をかえた起点とは驚き、またそれは有り難い縁にあつたものだと思つた。何もかもみな縁で珍しいものを書いた。

昭和三十年ころのこと、インドの大統領ラジェンドラ・プラサード閣下が来日したことがある。これが日本へ外国元首が来られた初めだとのこと。この大統領は自身はヒンズー教徒なのに、実はよく国内の積尊の遺跡保存・整備に骨を折つておられるのを感謝し、全日本仏教会として感謝の意をこめた表慶状を捧呈することになり、長井真琴(東大名譽教授)先生、全日本仏教会理事長の中山理々先生などがみえられ、その書式が打ち合わせられた。そして仏教画家として世界的な野生司香雪先生が金泥で絹地の横巻にブツガヤの大塔と法輪を大きく描き、その上に楷書、仮名まじりで表慶文を書き、巻物に表装し、さらに外国語大学の土居先生がこれをヒンズー語に訳したものをそえて、純銀製の篋に納めてインド大使館で贈呈式が行われた。

表慶文は一枚紙のものが多いいのに、これは絹製の下絵のある卷子本、実に珍しい一例であつた。

『筆間雜記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。

「書範」昭和五十六年十月